

靈山に参る女人

——二所の縁起と真名本『曾我物語』の世界から——

阿部美香

はじめに

中世の人々が仏教と出会い、その教えを実践する場として、靈地靈場への参詣が挙げられる。中世において、神は末世の衆生のために和光同塵する仏の垂迹であると考えられ、寺院に限らず、むしろ神の社への参詣も、仏教と出会う大事な場であった。では、そうした参詣の場において、仏教はいかに人々と向き合ったのか。本稿では、関東鎮守の大靈験所と称された伊豆山権現（現在の伊豆神社）、箱根権現（現在の箱根神社）の二所への参詣を語る縁起や物語を通して、中世の人々にとって靈地への参詣がいかなる宗教的体験の場として語られたのか、また彼らにいかなる救済が説かれたのかを読み取りながら、東国の人々の中に生きた仏教の姿を現しだしてみたい。

伊豆・箱根権現は、鎌倉幕府の誕生を支えた古き靈地として、鶴岡八幡宮に準じる社と位置付けられた、東国を代表する靈地である。鎌倉將軍による二所詣もつての有様は、『吾妻鏡』などに記録されるが、東国の人々が、いかなる願いを抱いて二所に詣でたのか、その祈りの内実を伝える資料はほとんど遺されていない。

ところが、視点を変え、二所詣の世界を背景に描かれた真名本『曾我物語』という長編の物語に目を向けるとき、頼朝や政子、曾我兄弟や虎など主な登場人物の参詣を通して、当時の人々の伊豆・箱根参詣の姿が、生き生きと伝えられているのを読みとることが出来る。

また、箱根神社には、鎌倉時代の当時に二所参詣の靈験利生を東国の人々に唱導するために創りだされた絵巻が、『箱根権現縁起』と名付けられて伝えられている。⁽²⁾内容は、

二所の神が前生に人間であったときの物語を語り鎮座の由来を説いた本地物語である。「本地物語」とは、神は仏が衆生を救うためにあらわれた存在であるという本地垂迹の考え方を背景に、神の前生を語って靈地靈場のはじまりや利生を唱導する物語である。かつて神は人間であり、人として様々な愛別離苦を体験したからこそ、衆生を救う神と現れたのだという物語を語り、最後に神と本地の仏の関係を明らかにして参詣の功德を説くもので、その種の物語は御伽草子や説経、古浄瑠璃、語り物芸能など諸ジャンルに広く展開する。そうした文学史の流れの上において、『箱根権現縁起』は本地物語を絵巻化した作品として最も古く、注目すべきものである。

真名本『曾我物語』は、絵巻が創り出され語られていた時代に生まれたのであり、物語という次元において、二つは共通した構造を有している。これらの二所の本地物語と真名本『曾我物語』について、そこにいかに二所参詣の利生があらわされたかを読み取り、神仏の靈験や利益を求め中世人たちの心意のありかを捉え直すことで、東国が生み出した独自の神話ともいべき真名本『曾我物語』の特質を浮かび上がらせることができよう。

一、女人の物語としての箱根権現縁起絵巻

箱根三所権現（僧形・男神・女神）と、伊豆二所権現（男神、女神）は、いわゆる神仏習合の思潮の許で形成された神々であった。それぞれの靈地には、『箱根山縁起^{並序}』と『走湯山縁起⁴』という漢文体で記された根本縁起があり、たとえば『箱根山縁起^{並序}』には、奈良時代に箱根山に修行する万巻上人の前に、箱根三所権現があらわれ、自らの本地の仏を明かして神と祀られたという縁起が記されている。『箱根権現縁起』絵巻は、そうした古い縁起を踏まえた上で、神がなぜ伊豆と箱根に鎮座したのかを、親しみ易い物語を通して語る。そのあらまは、次のようであった。

かつて、伊豆と箱根の権現は、天竺の斯羅奈国中将の娘「りやうざい（常在）御前」「りやうじゆ（靈鷲）御前」という二人の姉妹であった。常在御前は、継母から迫害され、様々な受難を蒙る。しかし、そのたびに神仏や亡き母、義妹靈鷲御前に助けられ、受難を乗り越える。やがて波羅奈国の太郎王子と次郎王子に助けられた姉妹は、王子の后となり、生き別れとなっていた父中将とも再会する。そして、みなで日本に渡り、大磯高麗寺から、常在御前夫婦が伊豆

山へ、父と靈鷲御前夫婦が箱根山へと赴き、衆生を救う神とあらわれたという。

絵巻は天竺（インド）の物語を語りながら、登場人物や建物を和風に描く。そればかりか、父の中将が大番役にゆく設定は鎌倉時代の御家人が奉公する大番役を想起させ、東国の人々に身近な物語となっている。その上で、やがて神とあらわれる姉妹の受難は、深い宗教性を帯びて語られるものであった。それを最もよく表すのが、常在御前の最初の受難である島流しの段である。継母の企みにより大海原に連れ出された常在御前は、後生を祈り和歌を詠み観音経を誦して、観音や地藏の名を喚^{よば}う。すると、観音が地藏や普賢菩薩とともに舟をうかべてあらわれ、常在御前を救う。

この場面では、大海原に連れ出され受難する常在御前が菩薩の舟に救われるまでのシーンが料紙を継ぎながら連続して絵に描かれる。それは、『法華経』普門品に、もし大海原で漂流し恐ろしい魚に襲われることがあっても観音を念じれば救われると説かれた「念彼観音力」の利生をあらわす。絵解きをするものは、とりわけ心を込めてこの場面を説き語ったことであろう。「あはれなる女人なり、我が

誓ひを違ふべからず」という観音の詞は、物語を見聞した人々、とりわけ女人の心に強く響いたに違いない。

そもそも、「常在御前」「靈鷲御前」という姉妹の名前自体が、『法華経』に記される「常在靈鷲山」という偈を分かち合い、仏教の教えを象徴するものであった。その偈は釈迦が常に靈鷲山で法華経を説いているということであらわす要文であり、広く知られた文句であった。姉妹は常に釈尊のイメージを負いながら、最後に伊豆と箱根に神とあらわれる。そのとき二所の霊地は「常在靈鷲山」として二つながらひとつの仏法のはじまりの地となる。そこに鎮座するのは、法華修行の実践を喜ぶ神である。絵巻の中で、神は自ら人として受難するという化儀を通して、仏教の教えをあらわしていたのである。

絵巻は、巻末に至って漸く箱根権現の社頭図が参詣する人々の姿と共に描かれ、かつて聖人が本地を祀りあらわした垂迹の神の姿が社殿としてあらわされる。そのようにして絵巻は、衆生を導く神の利生が仏の慈悲そのものであり、具体的には法華経の利生に基づくものであることを、難しい教義ではなく、物語草子のような愛らしい主人公の描写と和文の詞章および和歌をもって語り、霊地への参詣と結

縁を促していたのであった。それは、絵巻が女性や子供たちに向けて絵解かれ語られるものであったからであろう。物語を見聞く人々は、姉妹の受難や悲しみを通して仏教の教えに接し、二所の神の功德と参詣の利生を理解して、社頭図に導かれて哀れみ深い神と結縁したことであろう。

二、始源を担う女人たち

ところで、二所の神の物語が、姉妹を主人公として語られたのはなぜなのだろうか。伊豆山の主神は男神であり、箱根山では僧形の神であるから、主人公は男性でも良かったはずである。その上、物語の端緒をなしてその展開を押し進める役割を担っていたのは、生母と継母という、「二人の母」であった。絵巻は、平安時代以来の伝統的な女人の物語である継子いじめのモチーフを受け継ぎながら、あくまで女人の受難と救済を語る物語として造形されているのである。二所の本地物語が女人の物語として語られていることの意義をあらためて問うならば、そこには二所参詣の利生と救済が、女人の身の上においてこそもっとも強くあらわれるという、最も本質的かつ重要な問題が潜んでいるのではないだろうか。

試みに、絵巻の物語より先に成立していた根本縁起において、女人の救済がどのように描かれていたのかを探ってみると、伊豆山権現の縁起である『走湯山縁起』巻二に見出すことができる。それは、次のような内容である。

伊豆の国の目寮（目代）の妻に他夫のいる疑いが起こり、目寮は妻を捕らえて「標欄」（牢）の内に籠め置いた。妻は悲しみ合掌して、「南無木生仙人、我が無実の苦を解脱し給へ」と祈ると、たちまち標欄は破碎した。そこで、木生仙人は「蘭脱」と呼ばれるようになった。「蘭脱」というのは、妻の名が「蘭女」であった故だという。

ここに登場する木生仙人とは、伊豆山権現を大磯の海から日金山に祀りあらわして入定した松葉仙人の後を継ぎ、木の中より出て権現を祀ったと伝えられる仙人で、はじめて遍路抖擻を行い、伊豆峰行者の初代に位置付けられた特別な人物である。それが、女人を救済し「蘭脱」という名で呼ばれることになったというエピソードは、伊豆山の神の祭祀の始まりにあたって、女人の救済が伊豆峰の行者の働きを通して語られるものとして、重要である。「蘭女」という名は、修験の靈山における神を祀る巫女の共通の呼称としての「トラン尼」や「トラメ」の名に通じるもので

興味深い。金峯山の開創の縁起には、女人禁制の結果を越えて侵入を試みる女人として「トラン尼」が登場する。また修験の祖である役行者の母は、「白専女」と呼ばれ、大峰の登山口の母公堂に祀られていることは有名である。伊豆山にも、熊野・大峰と同じく役行者とともに白専女が祀られていた。伊豆山では、白専女を祀りその末裔を自称する巫女が、峰入りに赴く伊豆峰の行者たちを祓い清め送り出したことであろう。

また一方で、伊豆山には『箱根権現縁起』絵巻と同じく、女人を主人公にして霊地の利生を明らかにする縁起もつくられていた。それは、『走湯山縁起』と一具として著された『走湯山秘訣』である。『走湯山秘訣』は『走湯山縁起』をふまえて、あらたに権現の世界を神の側から語る縁起である。漢文体ではなく漢字片仮名混じり文で記された秘訣は、初木と呼ばれる巫女が浄土をめぐる一種の異界遍歴譚を通して、伊豆山権現の神の姿や浄土の有様が明らかにされていく。そこでは、男神や女神としての神の姿のみならず、その深秘の相が明らかにされ、最後に本地である千手観音が「千の御手千の御眼ある人」として登場し、その教えを受けることよって浄土巡りが終わる。

そもそも巫女初木とは、初島を創りだした女神であり、走湯権現の乳母であると同時に、氏人の始祖となる日精と月精の養母でもあるという、母なる女神であった。つまり『走湯山秘訣』は、伊豆山に参詣することの意義を、初木という、母なる女神であり巫女でもあるという特別な存在を通して明らかにするものであった。

このような女神の働きや女人の受難の物語が、本地物語の主人公たちと直結するわけではないが、伊豆山のはじまりを語るとき、女人の存在が参詣の利生や救済をあらわすものとして欠かせない媒ちであったことは確認できよう。無実の罪で牢に押し籠められた蘭女が救われる物語は、あるいは常在御前が継母に土牢に籠められるという第二の受難の物語の原風景であったかもしれない。そして、このことを踏まえて真名本『曾我物語』を読むとき、ここにも、霊地の利生を自らの身に担い現しながら、伊豆山と箱根山に参る女人の姿を見出すことができるのである。

三、伊豆・箱根に参る女人

真名本『曾我物語』は、『吾妻鏡』にも記録された曾我

兄弟の仇討ちを、「日本国大將軍」としての頼朝の誕生と、曾我御靈神の祭祀の始まりとして語る。それを宗教的に支えたのは、伊豆・箱根権現、そして富士山を中心とする東国の重要な靈地であり、物語には靈地への参詣を通して東国の王と御靈神にそれぞれ現れる主人公の姿が細やかに叙述されている。しかし、ここに女人を視点としてまた別の角度から物語を見ると、男たちの鬪争と合戦の物語を支え、二所の靈地の働きを担い、より人の世の身の上に則してあらわしていたのは、頼朝においては北条政子、曾我兄弟においては、大磯の遊女虎という、二人の女人であったことが見えてくる。

たとえば、頼朝が日本国大將軍となることが予言される重要な段として語られる伊豆山の夢合わせの利生は、頼朝と政子の伊豆山参詣によってもたらされたものであった。苦しい道行きを経て伊豆山に登った政子は、頼朝とともに権現に参籠して、自ら伊豆山の権現の縁起を語り、懇ろに次のような祈りを捧げる。

かくのごとき諸仏菩薩の応迹示現の御山なれば、歩み
を運ぶ輩は立ち処に神徳を蒙りて災難を他方に払ひ、
志を励ます族は日夜に福祐を被りて万人の恵みあり。

況んや我ら夫婦、俱に精進潔斎して丹精を神前に至して、降伏を宝殿に乞ふ。大幸を冥道に受けて、諸国を永代に預らむ。

ここには、伊豆山の縁起を踏まえた参詣の功德がはっきりと示されている。それは実際に唱導されていた伊豆山の利生であったろう。物語では、権現が政子の祈りを納受した証として、頼朝が將軍となり、政子自身も將軍の後家として日本国を知行する存在となって、「三国一の賢女」と讃えられたと記されている。

この政子の物語を、伊豆山における女人の受難と救済の物語として見るとき、そこに本地物語との相似を見出すことが出来る。継母にねたまれ、苦難の末に伊豆山に詣で頼朝と再会して將軍とその妻になる政子の姿は、継母の迫害を受け受難の末に太郎王子とともに夫婦で伊豆山の神とあらわれた常在御前と二重映しになる。もともと頼朝の身上については、やがて王となるにふさわしい遍歴の物語が貴種流離譚の構造を用いてなされていたが、それを支える政子の物語は、伊豆山における新たな「王と王妃の物語」を導き出し、一体となって東国の王権の始源を語るものであった。

これに対し、曾我兄弟のうち兄十郎の妻であった遊女虎については、箱根山への参詣をはじめ、積極的に仏教を實踐する姿を見出すことができる。曾我兄弟の死後、虎は兄弟の母とともに、兄弟とゆかり深い箱根権現に参詣し、兄弟の追善仏事の場で別当を戒師として出家し、回国の旅に出る。やがて曾我御霊社で不断念仏を行って兄弟を弔い、兄弟の母の往生の善知識を勤め、自らの母や仲間の遊女はじめ多くの女人を教化して往生を遂げ、「女人往生の手本」となる。

物語のなかで、自ら出家し多くの女人を教化する虎の働きは、二所の本地物語が語る箱根山の神の働きに繋がるものであった。それは、箱根山の僧形とあらわれた父神の姿と重なる。本地物語のなかで、姉妹の父である中将は、二人の娘を失った悲しみから世をはかなみ出家遁世し、姉妹を捜して回国の旅に出る。これが、虎御前の出家と回国修行の姿の背景にあるだろう。物語は、それを殊更に女人の身の上において語ろうとするのである。

ところで、真名本『曾我物語』には、二所の本地の物語について言及する場面がある。それは、曾我兄弟の父の助成が死に、その父（曾我兄弟には祖父にあたる）である助親が出家する場面において、次のように記されている。

波羅奈国の源中将は常在・靈鷲と云ふ二人の姫君に別れて、菩提心を發して形を替へつつ仏道に入り給ふ。その二人の姫君と申すは、伊豆・箱根とて日本国の垂迹として、今は関東守護の大靈験にて在す。

そこでは、二所の本地物語が愛子を失う悲しみ故に出家することの天竺のためしとして引用されているのであるが、曾我兄弟の死によって箱根山で出家し、多くの衆生を仏道に導き入れて往生を遂げる虎の姿は、まさに箱根権現の僧形の神の働きを、女人ながら実践するものであろう。

以上のように見てみると、真名本『曾我物語』において、政子と虎は、それぞれ伊豆山と箱根山の靈地の特色をいともあきらかに体现する存在であった。伊豆山に参詣し、將軍の妃となって日本を知行する政子と、夫を亡くし箱根山に出家する遊女虎の姿は、その境遇からすれば極めて対照的である。しかし、伊豆山の現世利益の功德を己の身に極める政子と、出家・孝養の山である箱根山の父神のごとくに衆生を仏道に導く存在となる虎の物語が一体となったとき、はじめて物語のなかに、いわば王法の山としての伊豆山と仏法の山としての箱根山という、二所の靈地が互いに分け持つ役割が見えてくる。絵巻の中で靈地の働きを担い

現していた主人公たちは、政子と虎という、中世を生きた女人に姿を変えて、あらたな二所の霊地の意義を語りあらわしたといえよう。

四、母の物語としての真名本『曾我物語』

政子と虎によってあらわしだされた二所の霊地の利生は、東国の人々が仰ぎ見た二所の霊地の姿そのものであったろう。その中で、真名本『曾我物語』が、仏教による救済の対象として真に焦点化することになったのは、曾我兄弟の母であった。

一般に、『曾我物語』は仇討ちの物語と称され、曾我兄弟の母は、幼い兄弟に仇討ちの志を植え付けながら、長ずるに及んではそれに反対し、第五郎を勘当するなど、愚かで哀しい武家の母として評価⁽⁹⁾されている。しかし、曾我兄弟が父への報恩謝徳の本願を果たすべく行動を起こした一方でなにより願っていたのは、自らの死後に残されることになる母の救済であった。これについては以前論じたこと⁽¹⁰⁾があるが、兄弟が母の後生を祈る思いは書き遺した文を通して母の元に届けられ、箱根山における兄弟の追善のため

の仏事法会を皮切りに、兄弟のための供養の場は同時に母を菩提へ導く縁となる。母は、兄弟のために曾我の里に大御堂を営み、それは頼朝の助成により不断念仏の道場となった。そして、兄弟の忌日に、母は聖衆が音楽をかなでながら来迎するなか、本尊阿弥陀の前で虎を善知識とし、端座して首^{こぶ}をたれ静かに往生を遂げる。

母の往生の描写は、往生伝や来迎図に描かれた、中世における理想的な女人往生のあり方そのものであった。つまり、母の往生が、頼朝の助成を受け、曾我兄弟の追善のために造られた御堂において、虎を善知識として阿弥陀の来迎のもとに実現されるところに、物語の理想とする救済の姿があつたのである。真名本『曾我物語』は、政子には自利の行、虎には利他の行を實踐する女人の姿を描きながら、その上で真に救済されるべき女人として悲母の往生を語っていた。

伊豆山に参詣し利生を得た政子、箱根山で出家し人々を教化して往生を遂げた虎、その虎を善知識として曾我の里で往生を遂げる母。これら三様の女人の物語が重なり合つて一つの物語となつたとき、日本国大將軍頼朝の威光のもと、曾我御霊神を祭祀することによって、王法と仏法の調

和に満ちた理想的な世界が、物語のなかに実現される。それこそが、二所を中心とした東国から発信された、鎌倉幕府のはじまりの神話であり、二所三嶋や富士をはじめとする東国の神々が支えるところの祭政一致の理想的な世界であつたろう。そうした東国の理想的な世界は、政子や虎、母という女人を媒ちとしなければ、語ることはできなかつたのである。

結 語

二所参詣がいかなる宗教的体験の場として構えられ、そこに仏教の教えがどのように生きていたのかを絵巻や物語を通して見るとき、そこには女人の存在が欠かせない役割を果たすことがうかがひあがつてきた。政子や虎、そして母は、それぞれ中世の人々が理想とする、伊豆山参詣、箱根山参詣や、理想の往生を体現しながら、物語のなかに生動していた。そこに、東国の人々の中に生きていた二所信仰の姿、とりわけ二所に詣って救済を願う女人の願望が、鮮やかに投影されていよう。

東国の王権神話や縁起のなかに、なぜこれほど力強く、

しかも積極的に立ち働く女人の姿が見出されるのか。たとえば、念仏による女人の往生を説いて女人から篤い信仰を受けた法然上人の絵伝には、法然の教化を受け仏道に励む女人たちが描かれるが、虎のように自ら回国修行を行い進んで衆生を教化するような力強い女人の姿はない。

東国の霊地が、本地物語をはぐくみ、本地物語の持つ働きを利用しながらより大きなスケールの王権神話を含みこむ長編物語を生み出す営みは極めてユニークな現象である。たとえば、全国的な修験の霊場として名高く、平安時代後期から鎌倉時代にかけて院による参詣が行われた熊野にも本地物語があり、五衰殿という母なる女神の受難の物語が語られ、江戸時代に多くの絵巻が作られた。しかし、「日本第一大霊験所」と讃えられた熊野でさえ、真名本『曾我物語』のような壮大な王権神話を生み出すことはなかった。真名本『曾我物語』が誕生する背景には、それをうながす大きな力があつたはずである。その原動力とは何であつたのか、そこにこそ、縁起や物語のなかに姿を変えて現れてくる女人の存在の意味を探る手掛かりもあるであろう。それは、東国の文化史、宗教史、文学史を考察する上でも重要な課題になると考える。

注

- (1) 箱根神社編『特別展 二所詣―伊豆箱根二所権現の世界』
図録(平十九・一)、および同図録所収、田辺旬「鎌倉幕府の
二所詣と箱根山」参照。
- (2) 筆者は箱根権現縁起絵巻について、箱根神社編『箱根の宝物』
(平十八・十二)に解説を行い、また真名本『曾我物語』にあ
らわされた二所詣での世界について前掲註(一)図録に論考を
寄せた。それぞれの論考の要旨は本稿の基礎となっている。
- (3) 箱根神社には室町時代の写本(白文本一卷と訓読点を付した
一卷)が伝えられている。奥書には、建久二年(一一九一)に
別当行実の名のもとに信救(大夫房覚明)が誌したとある。
- (4) 現存する最古の写本は、前田尊経閣文庫所蔵『走湯山縁起』
(五巻、全海写、南北朝時代)。
- (5) 物語が東国の武士の生活を反映しながら法華経と釈迦の伝
を用いて成り立つことは、前田雅之「箱根権現の縁起」『国文
学解釈と鑑賞』五二巻九号(昭六二・九)に指摘されている。
- (6) 阿部泰郎『湯屋の皇后』(平十・七、名古屋大学出版会)第
二章「女人禁制と推参」参照。
- (7) 本文の引用は『真名本曾我物語』1(昭六二・四、平凡社)
に依る。
- (8) これについては、拙稿「伊豆峯行者の系譜―走湯山の縁起
と真名本『曾我物語』」(『説話文学研究』三七号、平十四・六)

に詳論した。

- (9) 例えば、三木紀人「曾我物語」の兄弟の母」『國文學解釈と
教材の研究』十四巻十四号(昭四四・十)など。
- (10) 拙稿「曾我兄弟の母」(国文学解釈と鑑賞 別冊「曾我物語
の作品宇宙」、平十五・一、至文堂)。

〔追記〕

本稿は、昭和女子大学文化史学会第十七回大会シンポジウムにお
ける報告をふまえ、あらたに書き下ろしたものである。また、平成
十八年度文部科学省科研費補助金(特別研究員奨励費)による研究
成果の一部である。